

発達障害のある学生に対する心理教育的支援の在り方

西村 優紀美

Psychoeducational support for students with developmental disabilities

Yukimi Nishimura

1. はじめに

2020年度初めの新型コロナウイルス感染症の拡大は、大学における学びの形を根底から揺るがしました。学生へのカウンセリングや修学支援も、対面による面談はできなくなり、オンラインでのカウンセリングや面談になりました。このような状況に戸惑ったのは学生だけでなく、教職員も同じでした。学生への連絡やオンライン授業の準備など、授業開始までの短期間にたくさんの準備をする必要がありました。

障害学生支援を行うアクセシビリティ・コミュニケーション支援室（以下、支援室）では、新入生への初回面談はかろうじて対面で行うことができ、支援に関する方針を確認することができました。在学生への連絡は電話やメールで行い、履修登録やオンライン授業の手続きなどの確認や精神面の確認を行うことに忙殺されました。一年前には想像もしていなかった事態に直面して、従来から歴史を積み上げてきた相談体制では十分に対応できないことが起きていることを実感しました。

富山大学は2007年度より発達障害学生の支援を開始しました。大学入学前から希望する高校生への情報提供を行い、入学後は、修学やコミュニケーション支援等の大学生生活全般に係る支援、後半になると、卒論やゼミでの適応、就職活動の支援が始まり、卒業後も継続して就職活動をする卒業生の面談を行っています。また、就職した卒業生に対しては、本人の希望があれば、フォローアップ支援を行っています。大学における支援とは、「学生が新しい環境に参入するためのプロセスを

一貫して支援する」というミッションに基づいているからです。

発足当時から大切にしてきたのは、学生との対面による面談でした。修学支援を支援の目的としながらも、同時にコミュニケーション支援も行うことを目標に置いてきたので、その基本的な支援スタイルが崩れてしまうことに大きな不安を感じつつも、最も混乱しているのは学生であり、こういう時こそ、状況にあった支援スタイルに柔軟に変化させていくことが大切だと感じました。発達障害学生は、般化の困難さやこだわり等の特性により新奇場面への適応が難しいと言われていきます。先が見えない現状と、いつもと違う環境、決定事項が刻々と変わっていく日々は、私たち支援者も先が見えない不安と、これまでの日常ではないことに混乱し、あたかも発達障害学生の日常を疑似体験しているような感覚を持ちました。この経験は、改めて私たちが大切にしている対話の意味を考えるきっかけになりました。

学生相談の領域に障害学生支援という新しい領域が加わり、大学の学生支援体制の変革を余儀なくされた10年前と同じような考え方の変換を求められているのだと思います。

2. 高等教育機関における心理教育的支援

心理教育とは、もともと精神疾患を持つクライアントとその家族に対する疾患の理解促進のために行われるものであり、具体的には服薬指導や家族内コミュニケーションの調整、クライアント自身の社会適応を促すソーシャルスキルトレーニングなどを意味しています。また、学校教育の場面

においても、「心理教育」の重要性は詠われており、特に、問題行動の再発防止、予防、エンパワメントに力点を置いた「情緒面の育成」がアプローチの中心にあると言われていいます。

大学生は青年期から成人期に移行する発達段階において、自我と社会との相互関係の中で生起する心理・社会的危機に対して、人間関係や進学、就職、さらには人生観・価値観形成に至るまで、さまざまな場面で自己判断、自己決定が求められる時期でもあります。私たち大学関係者は、「青年期の発達保障」を念頭に置いて、障害学生の心理的成長・人間的成熟を援助し、大学および社会への適応を援助する役割を担っていることを忘れてはなりません。

3. 心理教育的支援の具体例とその効果

(1) 個別面談

個別面談は定期的な支援者との間で行われます。まず、「支援の目的・方法」に関して、支援者側から説明し、学生の理解を得ます。面談は修学支援が中心で、修学上の困りごとが出てきた場合、障害特性との関連があるかどうかを一緒に検討します。修学支援の根幹は、実行支援です。ライフ・スキルやスタディ・スキルを獲得することによって、修学状況が改善し、その事実が学生の自己効力感を高めることにつながります。

学生は支援者との対話で、さまざまな修学上の課題について語り、一緒に方策を練り、問題解決をしていきます。自分が問題解決に関与しているという事実が、学生に小さな自信を生み、自分自身への肯定的感情が芽生えるきっかけになるのだと思います。人は自分自身の重大なテーマに向き合おうとする時、もう一方でそれに匹敵するだけの自分への肯定的感情が必要であり、その自己肯定感が彼らの苦しい作業を下支えしているように思います。

発達障害のある大学生との対話は、現在の困りごとに焦点を当てていますが、語りは現在から過去のできごとの語りについていく場合があります。うまくいくことが少なかった過去のつらい記憶が、今の自分を苦しめることもあります。「今、

確かにできている」という事実が、彼らのネガティブな自己認知を、肯定的な自己像に敷き直してくれます。出来事の語り、アイデンティティの語りへと変わっていく対話が、ここでは展開されているように思います。卒業年度には、職業人としての未来の自分を思い描きながら、自己分析や企業分析を行っていく必要があります。自分にとってより良い環境を作っていくための「セルフ・アドボカシー・スキル」の獲得も、重要なテーマであり、個別面談での対話は青年期の発達課題を達成するための大切な場であると言えます。

個別面談の内容

- ・ 支援の目的・方法に関する合意
- ・ 障害学生に関する支援ニーズの把握
- ・ 修学上、問題となることからの確認
- ・ 問題と障害特性との関連を話し合う
- ・ 修学上の困りごとを解消するための実行支援
 - － ライフ・スキル（生活、体調、睡眠）
 - － 自己管理スキル（スケジュール管理等）
- ・ 定期面談による修学状況の確認
- ・ 問題への対処法を探る
 - － スタディ・スキルの伝授
- ・ 学生がより良い対処法を選択する
- ・ 合理的配慮に関する話し合い
- ・ 支援会議（教職員との話し合い、配慮内容の検討）

(2) コミュニケーション教育

コミュニケーション教育は、支援者によってさまざまな方法が考えられています。ソーシャルスキルトレーニングや行動療法、芸術療法、音楽療法など、小集団活動の方法は、対象となる学生の特性を考慮した多彩な内容を考えることができます。

私が大学で行っているコミュニケーション教育の内容を挙げていますが、活動の目的は、「安心でき、多様な価値観が尊重される場で、自分なりのコミュニケーション様式を創造する」こと、また、「他者の思いに気づき、相手の意図や気持ちを想像し、理解しようとする」と、そして、「自分の思いを他者に伝えるための方法を知ること」です。

コミュニケーションは強制されたり、考えを押し付けられたりしてスキルが獲得されるわけではありません。私は、コミュニケーション上の困りごとを抱えている学生に対して、豊かなコミュニケーションの場を提供すること自体がコミュニケーション教育の第一歩であると考えています。参加している人たちが、存在を脅かされることなく安心して交流できることが重要で、多様な価値観が尊重されるなかで、人は自分なりの関わり方に自信を持つことができるのだと思います。

コミュニケーション・ワークでは、具体的な関わりの中で相手の思いに気づいたり、相手の気持ちを想像したりする機会を持ちます。また、相手もまた、自分の考えを尊重してくれるという体験をすることができます。他者の思いに気づくこと、自分の思いを他者に伝えることができるようになるためには、ある程度のコミュニケーションスキルが必要です。心地よい集団の中で、他者とかかわることを楽しみ、自らコミュニケーションスキルを学びたいと思う、そんな場を提供することの意義は大きいと考えます。

コミュニケーション教育

- ・ **小集団活動(ランチ・ラボ)**
 - 会食(雑談しながらの食事)
 - テーマ・トーク: テーマを決めて、それに関する自分の考えや体験を表現する
 - グループの考えとしてまとめ上げる: メタ・ナラティブの生成
- ・ **コミュニケーション・ワーク**
 - グループで芸術的活動を媒介にした、非言語・言語的コミュニケーションを図る
 - 具体的な身体活動や楽器の演奏、絵を描くなどを、一人あるいは複数人で行う

(3) 家族支援

家族支援は、学生の修学を支えるための重要な支援となっています。

家族との面談では、修学状況や合理的配慮に関する報告が中心となります。うまくいかない状況がある場合も、その事実を伝えますが、同時に、

学生本人がどのような工夫をすることができるようになったかも伝えていきます。

また、合理的配慮の申請により、どのように学びが保障され、評価として反映されたかについても報告していきます。

生活面に関する支援は、支援室では限界があるので、どの部分を家族に担ってもらうかを話し合います。

発達障害のある学生は、自分自身の体調について自覚することが難しい人が多いので、体調管理のサポートもしてもらいようにします。また、修学状況を正確に知ってもらうことによって、どのような就職のカタチが良いのかを、家族で話し合ってもらい視野に入れていきます。

学生の障害特性についての理解を深め、学生の頑張りをねぎらい、励ますことによって、学生自身が、家族から承認されることによる安心感、自己肯定感を持つことができます。青年期の発達を保障するための家族の役割は大きく、その安心基盤を背景に、卒業後の社会参入への意欲は支えられるのだと思います。

家族支援

- ・ **修学の状況, 合理的配慮に関する報告**
 - 出席状況
 - レポート課題の提出
 - スケジュール管理
 - 生活面の課題
- ・ **生活面での問題**
 - 睡眠, 食事, 掃除, 洗濯, 金銭面の管理
 - 持ち物管理, 洋服, 清潔面
- ・ **体調管理への関心**
 - 体温計測, 睡眠表
 - 病院受診, 服薬

4. 発達障害の特性がある学生との対話の意義

発達障害のある学生の支援において、対話は非常に重要な意味を持ちます。

対話においては、学生と支援者それぞれの思い

や考えが、二者間で共有されるわけですが、大切なのは、それぞれが語る言葉の意味が、相手に正しく伝わっているということです。

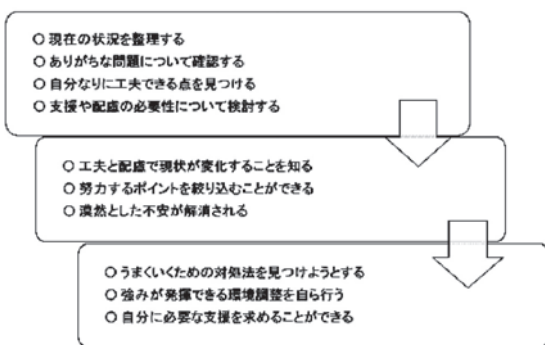
一般的に「自己」は、自分自身について物語ることを通じて生み出されると言われています。

学生が自分自身の意思を自覚するためには、他者との対話の中で、自身の経験や思いを承認してもらい、共有してもらう必要があり、支援者は対話を通じてその機会を提供していることを自覚する必要があります。

対話がどのような意味を持つかについて少し考えていきたいと思えます。

学生が自分自身の意思を自覚するためには、他者との対話の中で、自身の経験や思いを語る場が必要です。面談の最初は、学生が現在の状況を支援者に報告し、実際に何があったかを整理します。もし、うまくいかない状況があれば、自身の特性やありがちな行動と照らし合わせ、問題の要因を話し合い、できる工夫について一緒に検討していきます。その中で、障害特性に起因するものであれば、合理的配慮の内容の検討を行います。

対話による自己理解のプロセス



次に、工夫や配慮により、問題が解消する体験をすると、学生は自分が努力すべき点を絞り込むことができます。エネルギーを学修に向けることができ、これまでの漠然とした「不安感」が解消されていきます。

そして、次の段階に入っていきます。発達障害のある学生は、より幅広く深い知識を得ることに

長けていますから、よりよい環境で学ぶことができると、そもそも持っている優れた能力を発揮できるようになっていきます。やる気がないように見えていた学生が、学び方の工夫を考え、学修環境が整うと、驚くほどの積極性を発揮することがあります。

自己理解のプロセスとは、「私にはどのような特性があり、どのような工夫や配慮があれば、他の学生と平等な学びのフィールドに立つことができるか」ということを、学生自身が考えるプロセスのことをいいます。大学関係者と学生との対話は、学生の自己理解を促進する機会としての意義があると言えます。

大学における障害学生支援において、「建設的対話」という言葉が良く使われています。

合理的配慮は、支援を必要としている障害学生の申出から検討が始まります。学生は自分に必要な配慮や支援を主体的に表明し、大学との建設的対話によって、共に決定していくというプロセスがここにはあります。

大学は、適切と思われる配慮を提案するために建設的対話を働きかける役割があります。障害のある学生が自ら社会的障壁を認識して正当な権利を主張し、意思決定や必要な申し出ができるように、必要な情報や自己選択・決定の機会を提供し、学生の「意思表明を支援」していきます。

「意思決定」とは、「自分の置かれた状況を客観的に認識して、意思決定を行う必要性を理解し、そうした状況に関連する情報を理解、保持、比較、活用して、何をしたいか、どうすべきかについて自分の意思を決めること」とであると言われています。この意思決定のプロセスに焦点が当てられることによって、意思決定を他者の支援を借りながら行う「支援された意思決定」の概念を取り入れることが可能となるのです。発達障害のある学生の中には、自分を含めた周囲の状況や困りごとを認識していなかったり、うまく表現できなかったりする人がいます。支援者は、学生が自分自身の最善の利益につながる自己決定ができるように、対話のなかで「今の状況と困りごと」を把握する

ために様々な状況を一緒に整理していきます。

学生が自分にとってよりよい選択、適切な判断ができるよう、支援者は慎重、かつ粘り強く関わりつづけていく心構えが必要です。私たち支援者は、学生の意思決定や意思表示を性急に求め、学生本人の自覚や意思を軽視してしまうことのないように、支援者としての役割を忘れないようにしなければなりません。

人は、自分自身の考えを他者に承認してもらう中で、自分と社会とのつながりを意識できるようになっていきます。社会性を獲得するには他者との語り、つまり、対話の場が必要です。将来に向けて、学生が自分なりの生活の仕方、学び方、働き方を、考え、選択することができることが大切であると考えます。

<参考文献>

- ・市橋直哉（2000）学校における心理教育的アプローチの構造：形式的側面を中心にして.東京大学大学院教育学研究科紀要.39.245-253.
- ・スーザン・ヤングほか著,田中康雄監修（2015）大人のADHDのアセスメントと治療プログラム. 明石書店.
- ・西村優紀美（2018）合理的配慮に基づく大学生への支援. 教育と医学66-11,74-81.
- ・西村優紀美（2018）基調講演Ⅰ「発達障害学生の就労を実現するための支援の在り方」,日本学生支援機構専門テーマ別セミナー：発達障害学生の就労を実現するための支援の在り方～意思表示支援とセルフアドボカシーを中心に.
- ・本博明（2002）<ほんとうの自分>の作り方－自己物語の心理学－.講談社現代新書.

